

令和 4 年 5 月 30 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K00973

研究課題名(和文) 室町・戦国期史料の理解深化に資する小早川氏一族の画像賛に関する研究

研究課題名(英文) A study of the texts in the portraits of the Kobayakawa clan, with the aim of gaining a deeper understanding of the historical materials of the Muromachi and Sengoku periods.

研究代表者

斎藤 夏来 (SAITO, Natsuki)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：20456627

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 700,000円

研究成果の概要(和文)：大徳寺黄梅院伝来の小早川隆景寿像、つまり生前画像に玉仲宗瑠が著した1590(天正18)年の賛を検討した。小早川隆景は、父の毛利元就が信奉していた中国の伝説的な軍師、張良に関する理解を玉仲にたずねたとみられる。玉仲は、張良とは何かを知るには、人間同士の争いで勝つ、という発想ではなく、人間には決して勝てない自然現象として自分を捉えなおすよう説き、隆景を父元就の呪縛から解放したと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、第一に、文化財として一般にも認められている肖像画に含まれている文字情報である画像賛について、従来あまり顧みられることがなかったが、そこには史料としてどのようなことが書かれ、どのような価値があるかをあきらかにした点である。第二に、画像賛として書かれている内容は、自然の一部として自身を含む人間や社会を見直せと読み取り得るものであった。つまり、人々の生きる目標であるとか、いずれは亡くなる命をめぐる価値であるとか、現代社会では希薄になっている信仰というものを学問的に捉え直す手がかりを得られたと考えている。

研究成果の概要(英文)：I examined the 1590 poem written by GYOKUCHU sosyu on the statue of Takakage Kobayakawa in the Daitokuji Obai-in Temple, that is, the image during his lifetime. Takakage is believed to have asked GYOKUCHU for an understanding of Zhang Liang, a legendary Chinese warrior whom his father Mori Motonari worshiped. GYOKUCHU preached that in order to know what Zhang Liang is, he should reconsider himself as a natural phenomenon that humans can never win, rather than the idea of winning in a conflict between humans. It is believed that he was rebuked.

研究分野：日本中世史

キーワード：五山文学 玉仲宗瑠 張良 小早川隆景 毛利元就 大徳寺

## 1. 研究開始当初の背景

本研究で検討を加える画像賛は、五山文学の主要なジャンルである。五山文学にかかわる学術的な推移は、おおよそ三つの潮流に整理できると考えている。

第一の潮流は、五山文学の源流をなす中国史、中国文学史である。

宮崎市定『東洋的近世』(初版 1950年)は、中国宋代の社会経済の実力者であった中間層、いわゆる胥吏の「発生」および「横行」に着目した仕事だが、文化史にも深い造詣を示す。そのなかに、「中国における禅宗は、日本に入って武士社会に受用せられたような意志的な修養を目的とするものでなく、むしろ文学的な情趣豊かな生活享受を旨とした詩的宗教であつたらしい」という重要な指摘がある。吉川幸次郎『宋詩概説』(初版 1962年)は、日本の五山僧にも大きな影響を与えた宋詩について、「社会史家、経済史家の、看過しがたい宝庫である」と指摘した。他方で、宋詩の重要な特質である「仏教ことに禅との関係」については、不案内を理由に検討を保留した。

日本の五山僧は、自身の檀越(パトロン)を時に「胥吏」になぞらえており、五山僧の詩文が社会経済史および政治史の史料でもあるとすれば、その検討を通じて、日本中世社会の実力者たちの宗教的政治生活を具体的に解明し得るのではないかと考えられる。

第二の潮流は、文献史学において進められてきた宗教史研究である。

宮崎市定も端的に述べたとおり、日本宗教史の一分野としての禅宗史は、今でも「意志的な修養を目的」とした宗教の歴史、いわば「武士の坐禅」を中心とした精神史だと理解されがちである。おそらく鈴木大拙のいう「哲学的な見地」に由来しており、史料に基づく歴史的理解とは言いがたいが、歴史教科書でも「禅宗 = 精神鍛錬」説は根強い。しかし中国に限らず日本の場合も、禅宗とりわけ五山僧の営みは、宮崎のいう「文学的な情趣豊かな生活享受を旨とした詩的宗教」として捉え直すべき余地が十分にある。

他方、近年の日本中世宗教史研究では、禅宗史研究といった宗派史的研究の克服をめざした黒田俊雄以来の顕密仏教論が主導的な役割を果たしている。ただし顕密仏教論の流れをくむ諸研究は、戒律や祈祷など、他の仏教諸派の特徴をもって禅宗も理解できるという予断が強すぎるために、中世禅宗の重要な特質である宋学・儒学との融合を見過ごしがちである。膨大に残された五山僧の詩文を用いて、宋学的要素も含めて中世禅宗の特徴を理解してみようという試みは、事実上敬遠されてきたといえる。敬遠される理由は、おそらく、中国詩文の余流のような五山文学には、文学的にも歴史学的にもあえて検討対象とするような価値などないという感覚、つまり五山の文化を厳しく排撃した津田左右吉など、敗戦後にかけて形成された「国民史」的な感覚によるところが大きいと思われる。

しかし近年の日本史学では、「東アジアの中の日本史」という考え方が定着してきており、列島社会における中国銭や陶磁器の広範な流入を重要な事実と受け止め、本格的に検討できるようになっている。中国銭や陶磁器と同様に、五山文学という漢詩文もまた、列島社会の隅々に浸透し定着していたのではないかと、という「問い」が、ここから生まれる。

第三の潮流は、画像や詩画軸を研究対象とする美術史など隣接分野である。

1990年代を中心に、伝源頼朝や伝足利尊氏騎馬像など、著名な画像に描かれている像主について、美術史と共同して見直しをはかる研究が目撃された。そのうち近年の文献史学における対外関係史研究でも、中国銭や陶磁器などの流入のほか、海を越えた詩画軸類の授受に着目した成果が示されている。いずれも、こうした文物に含まれる文字以外の情報

の引き出し方について、美術史など隣接分野に学ぶ部分が多い。

ただし画像については、著名な肖像画の像主論が一段落したのち、目立った進展はみられない。美術史の分野でも、室町・戦国期以後に激増するいわば平凡な作例群の検討は、事実上後回しになっていると聞く。とくに室町・戦国期の諸分野の有力者について作成された画像群は、「美」的な達成が必ずしも高度ではなく、美術史の関心対象にはなりにくい面があるらしい。しかしそれら平凡にみえる画像群の作成と伝来により、どのような社会関係や世界観が形作られようとしていたのか。そのような「問い」への取り組みは、画像に書き込まれた像主にまつわる画像賛、つまり文字史料の検討を得手とする文献史学により先導されるべきである。

## 2. 研究の目的

日本中世史研究の主な素材として、五山文学やその一角を占める画像賛を用いようという試み自体が、これまでほとんど存在しなかったといって差し支えない。たしかに、研究素材となる五山文学の公刊などでは、『五山文学新集』の編集で知られる玉村竹二ら先学が大きな成果を示している。しかし玉村の主要な関心事は、自らが禅僧のように生きたいという独特のものであり、五山文学に見受けられる政治・社会・経済的な諸要素への言及は、驚くほど冷淡である。玉村はあまり関心を示さなかったけれども、玉村により着実に翻刻されているこうした諸要素に、あらためて過去の人々の人間的なエネルギーを読み取る作業は、私たち後進に残された未着手の課題であり続けている。

本研究でとくに留意したのは、一般の日本史研究で活用の方法が鍛え上げられてきた古文書や古記録などの史料と、五山文学作品との対照作業である。これまでにも、古文書や古記録に記述がない事柄について、たとえば小早川氏に関し河合正治、宇喜多氏に関し石田善人が、それぞれ補助的に画像賛を援用した検討を試みている。しかし、描かれた像主の称揚を目的とする画像賛は信頼性が低いという常識的見解も根強く、一方で、画像賛のどのような記事がどのようにその史料的価値を損なっているのか、具体的に検討されたことはない。本研究では、古文書・古記録と五山文学とで齟齬が生じる部分を積極的に見出し、五山文学を、従来のように信頼性のない誇張や理想化とみて検討対象から遠ざけるのではなく、むしろ人間の内面に関わる宗教史料ならではの機密的史料として評価しなおし、古文書や古記録の解釈をも左右する起点となり得ることを明らかにしようという発想を大切にしたい。

## 3. 研究の方法

具体的な素材として、五山系の安芸仏心寺檀越であった小早川氏一族の画像賛群を検討対象としたが、そのなかでも、画像に描かれている像主本人の注文による生前画像に対する著賛であると確認できた大徳寺黄梅院伝来、小早川隆景寿像に対する玉仲宗琇の著賛に検討対象をしばらくこみ、いわゆる戦国大名文書としては抜群の質量をほこる毛利・小早川・吉川家文書との連動関係、相互に読み込める内容をあきらかにすることをめざした。

研究方法としてとくに留意したのは、検討対象とした隆景寿像賛の内容について、像主や著賛者を取りまく政治・経済・社会状況の所産とだけみるのではなく、五山文学の系譜をひきつぐ側面、つまり政治・経済・社会状況をある程度相対化するような力をもつ古典としての側面をもつと見通し、いわば政治・経済・社会状況と古典との緊張関係を見出そうとしたことである。

また研究を進める過程で、第一に、関連する中世文書も存在する近世の百姓・武家の共

同作業になる家系図、第二に、江戸幕府の寺社政策の特質を示す寺社領朱印状、第三に、近隣の中世以来の禅宗寺院である妙興寺文書など、さまざまな素材を検討する機会を得たため、研究課題の中心である隆景寿像賛をとりまく中世・近世移行期の政治と宗教との関係を考える参考とすべく、本研究に付随する成果としてあわせて公表することとした。

#### 4. 研究成果

検討対象としてとりあげた小早川隆景寿像賛のうち、とくに中国の伝説的な軍師、張良に関する理解は、日本史学に属する先学によって、隆景の父、毛利元就の厚い信奉対象であったことがすでにあきらかにされていた。ただし先学の検討は、主として日本史学的手法に即して、毛利・小早川・吉川家文書として残る古文書類を中心に、元就、隆景父子がおかれていた政治・経済・社会状況から、彼らの張良信奉をあきらかにしようとするものであった。これに対し本研究では、玉仲宗琇の著賛は、彼らをとりまく政治・経済・社会状況だけでなく、張良をめぐる古典の長い蓄積を無視しては理解しがたい特徴を抽出・重視し、政治・経済・社会状況との付き合いをを試みた。

隆景寿像賛に対する玉仲宗琇の著賛には、不可解な点がある。すなわち、張良の無敵の兵法というものは、古典の正統な理解に従えば、太公望 黄石公 張良の順に授受されたはずであるのに、著賛では、まず張良の女性的風貌について述べられ、それが太公望の兵法にも匹敵するという叙述の逆転である。この逆転現象について、先行する五山文学作品をできる限り博搜した結果、女性に接して生じる思慕の情のような自然現象に人は勝てることなど出来ない、という解釈を導き出すことができた。一般的にもよく知られている元就の三子教訓のなかでも中核的な位置を占める教え、すなわち、元就の三子は張良にすら勝てるように結束せよ、という教えを、戦国期列島社会に特有の高慢であるとたしなめるかのような室町期五山文学の余流を、ここに見出したい。今後の中世および近世の思想・信仰と政治・権力との緊張関係をみなおすうえでも、有効かつ興味深い素材を提示できたものと考えている。

付随して公表した成果についても付言する。

第一の、近世百姓の家系図成立については、2009年に知多大仙寺で発見された延徳3年(1491)古文書の差出人である左衛門大夫について、大仙寺所蔵の過去帳と、名古屋大学附属図書館所蔵の尾張藩医野間家文書に含まれる天木氏系譜とが照合可能であることに気づき、執筆したものである。左衛門大夫については、かつて中世史料の収集検討に基づき、戸田宗光説が提案されたこともあるが、近世史料の収集検討に基づいてみると、戸田氏にならぶ知多半島域の有力者であった佐治氏の被官層と通婚関係をもつような階層に属した家翁常珍庵主(大仙寺過去帳) = 天木越智尉・法名家翁常珍庵主(野間家文書系図) = 天木左衛門太夫(南知多町川合家文書)に該当する可能性が見出された。近世初期有力百姓の先祖 子孫認識の実態をすることのできる貴重な事例を提示できたと考えている。

第二の寺社領朱印状については、江戸幕府の将軍徳川氏が、なぜ朱印状とよばれる文書を数千通規模で発給し、ごく零細な規模の寺社領にいたるまで、その存在を保証したのかを問うた。その際、徳川寺社領朱印状の様式は、律令制の変質とともにあらわれてきた様々な公文書のうち、当事者の授受を前提としない様式を継承している点に着目した。発給の背景を詳しく検討してみると、当初は豊臣秀吉への臣従、ついで、家康から秀忠への将軍職の継承など、さまざまな文書受給者以外との関係が影響している。しかし朱印状の様式をもっとも大きく左右した要因は、本来は宗教的な営みである土地開発をめぐる各地の小

規模な紛争である。寛永大飢饉後の農村復興という問題が関連している可能性もある。寺社領朱印状は、その受領者であるとは限らない各地の百姓らが、開発の結果生じる帰属不明確な土地を寺社朱印地として解消し、地域内の対立を解消するうえで役立てることを意識して、発給されていたと考察した。

第三の、尾張妙興寺をめぐる五山文学の検討では、はじめに、妙興寺開山にあえられた著名な渡来僧、明極楚俊の教えを示す詩文の読解作業を行った。ついで、妙興寺開山以下が、室町幕府につらなりながら、どのようにして地域社会の期待にこたえていったか、具体的には、国人・名主層に属する妙興寺檀越たちの生死を全うしたいという思いに、経済的、思想的にどのように対応していたのかを確認した。さらに、本研究の主題でもあった隆景寿像賛と近い関係にある素材であるが、妙興寺に伝来している足利義教画像賛や豊臣秀吉画像賛などを検討した。具体的には、最高権力者にとって禅宗のもつ意味がどのように変化したのか、つまり最高権力者自身に必要とされた段階から、臣従者たちの主君解釈をみだす段階へと変化したのではないかと見通した。

以上、三件の副次的作業は、いずれも、研究の主題とした隆景寿像賛や五山文学の広大な裾野、あるいはその後の展開などを確認する作業の一環になったと考えている。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 齋藤夏来	4. 巻 17
2. 論文標題 知多大仙寺檀越天木氏をめぐる古文書・過去帳・系図	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学附属図書館研究年報	6. 最初と最後の頁 46,56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋藤夏来	4. 巻 3
2. 論文標題 徳川寺社領朱印状の様式変遷と朱印地開発	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 351,371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋藤夏来	4. 巻 5
2. 論文標題 無敵の兵法を求めてー小早川隆景寿像賛の検討	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 名古屋大学人文学研究論集	6. 最初と最後の頁 215,234
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 齋藤夏来	4. 巻 巻なし
2. 論文標題 妙興寺をめぐる五山文学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 一宮市博物館・妙興寺研究会編集 妙興寺文書の世界	6. 最初と最後の頁 19,24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 齋藤夏来
2. 発表標題 日本中世農村の空間祭祀と個人供養
3. 学会等名 中世史研究会2021年11月例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------